賛助広告ご協力企業一覧

広告サイズ		企業名	代表者氏名	(卒業年・科)	所　属	掲載ページ
L(h4)	カラー	鎌田工業株式会社	鎌田　満雄	(S27C)	東京秋工会	裏表紙
	カラー	アイシン産業株式会社	宮川　良一	(S34M)	東京秋工会	裏表紙
L(h3)	カラー	サンパウロ・ラーメン餃子専門店「あすか」	伊藤　武	(S36E)	東京秋工会 ブラジル在住	54
L	カラー	東神興業株式会社	夏井　雅樹	(S58M)	東京秋工会	29
		澤木萬國特許事務所	澤木　誠一	(S26E)	東京秋工会	5
		合同会社アーバンコンサルタント	三平　俊悦	(S39A)	東京秋工会	4
		新榮橋梁建設株式会社	秩父　清二	(S39C)	東京秋工会	22
		Aターンプラザ秋田	–	–	–	26
M	カラー	テンシャル株式会社	大塚　廉造	(S32K)	東京秋工会	17
	カラー	株式会社オー・ティー・ティー・エス	田中　誠悦	(S32K)	東京秋工会	27
	カラー	ランドオーナーオフィス	地主　勝己	(S37C)	東京秋工会	13
	カラー	労働安全コンサルタント	小野　鐵雄	(S38C)	東京秋工会	32
	カラー	有限会社伊藤貴金属店	赤塚　京二	(S40C)	秋田本部	28
	カラー	株式会社ジオ	佐々木　進	(S40S)	東京秋工会	37
	カラー	株式会社三山コンサルタンツ	佐々木　進	(S40S)	東京秋工会	31
	カラー	株式会社KM	伊藤　幹夫	(S46A)	東京秋工会	39
	カラー	プランニング&デザイン_KF・ワークス	舩木　一美	(S48M)	東京秋工会	8
	カラー	アルカディア市ヶ谷	–	–	–	14
		地鶏串焼割烹「音羽亭」	–	–	–	38
		株式会社渡辺佐文建築設計事務所	渡邉　佐文	(S25A)	秋田本部	40
		富士コンサルタンツ株式会社	野呂　昭光	(S37C)	東京秋工会	25
		株式会社斉藤建設	北埜　博	(S44A)	東京秋工会	18
		株式会社アクーヴ・ラボ	舩木　一美	(S48M)	東京秋工会	7
S	カラー	ギタリスト「岩見谷洋志」	岩見谷洋志	(S41E)	東京秋工会	47
	カラー	株式会社北勢工業	太田　博之	(S56K)	秋田本部	47
		株式会社アドテクノ	佐々木　武	(S29M)	東京秋工会	21
		有限会社不二コストプラン	宮越　敏光	(S38A)	東京秋工会	39
		株式会社汎建築設計事務所	鈴木　誠一	(S38A)	秋田本部	21
		船木技術士事務所	船木　整	(S43C)	東京秋工会	46
		株式会社償研	池田　昌憲	(S47A)	秋田本部	12
		彩光建設株式会社	下總　勉	(S47A)	東京秋工会	34
		有限会社開商	–	–	–	34
		有限会社ワシヤプロモーション	鷲谷　透	(S56M)	東京秋工会	12

以上33の企業・個人の皆様からご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

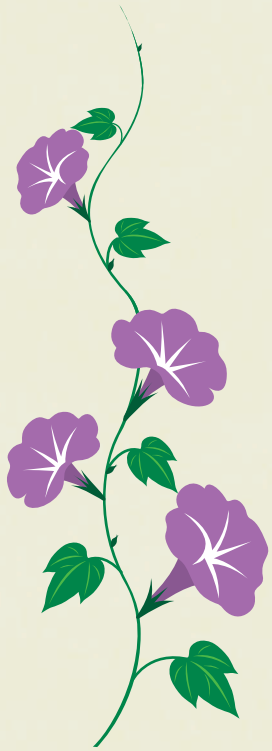
編集後記

50歳の時に中国語を学習して、本誌に台湾・中国訪問記「再来一杯茶」を掲載させてもらっている。時々感じるのは、同じ単語で日本語と中国語で意味が違うのがある。一例として作詩と作詞であるが、どちらも“さくし”と発音するためか、日本ではその使い方に曖昧さを感じる。中国語では“詩”と“詞”はまったく違う発音で意味も異なり、詩は韻文で詞は言葉や楽曲の歌詞のことである。本会報金砂に掲載している母校の校歌は「相馬御風作詞」であるが、校歌を書いた古い資料の中に「作詩」と書かれていたのを見たことがある。校歌を作成した最初は作詩なのか作詞だったのか分からないが、校歌は散文ではないが、中国語でとらえると韻文とも言い難いと思われる。これから母校校歌は作詞の方が適しているのではないかと思う。

編 集 長　**嵯峨 良平** (S43E)

校歌をホーム・ページに掲載する際に参照した資料に「相馬御風 作詩」とあったのでそのまま引用したところ、「作詞」の間違いと指摘され変更しました。調べると歌の場合は「作詞」とするのが一般的ですが、敢えて「作詩」と主張している人も少なくありません。校歌の資料を書いた人は「作詩」派だったのかもしれません。会報の編集委員をしていると原稿の査読をしますが、筆者の意図が解らずに変更を加えているのでないかとの思いが常にあります。特に古くから伝わった資料などはそのまま伝える義務があるように思います。

副編集長　**赤川　均** (S41E)

AI(イラストレータ)の台紙上にWord原稿の基本文章の部分を抜き出しコピー&ペースト。AI上にはWord上に配されているようには絶対ペーストされない。例えばWordの文頭一文字自動送りは、AIのような印刷用編集ソフトでは有効ではない。その他にもいろいろ。だからまずはAIにペーストした文書全体に目を通し、文頭や文節の狂い、句読点が頭に来ていたら前部分を文字間詰めして後に回るようにする、他諸々の調整を文書全体に施す。それで紙面に占める文章の割合がはっきりする。で、写真のサイズと配置位置が決められる。スペースを開け、事前に印刷用データに変換しておいた写真と広告をリンクで置く。タイトル文字とキャプション入力でやっと基本入力終わり。最後に全体レイアウトの調整。会報の編集制作ではここが一番の肝、これで全体の出来具合が左右する。これに余計な時間が係ることが往々、時間オーバーに繋がる場合多々。会報制作はこの一連をページ数分繰り返す。最近、集中力維持時間が昔に比べ短くなっていることを感じる。いろいろ含め、そろそろ潮時・・・なのかも？

副編集長　**舩木 一美** (S48M)